

東北(太平洋側) ハイブリッドとうごう 2号S & 4号S【早生品種】栽培暦 一版

2025年11月 (株)水稻生産技術研究所

作期目安

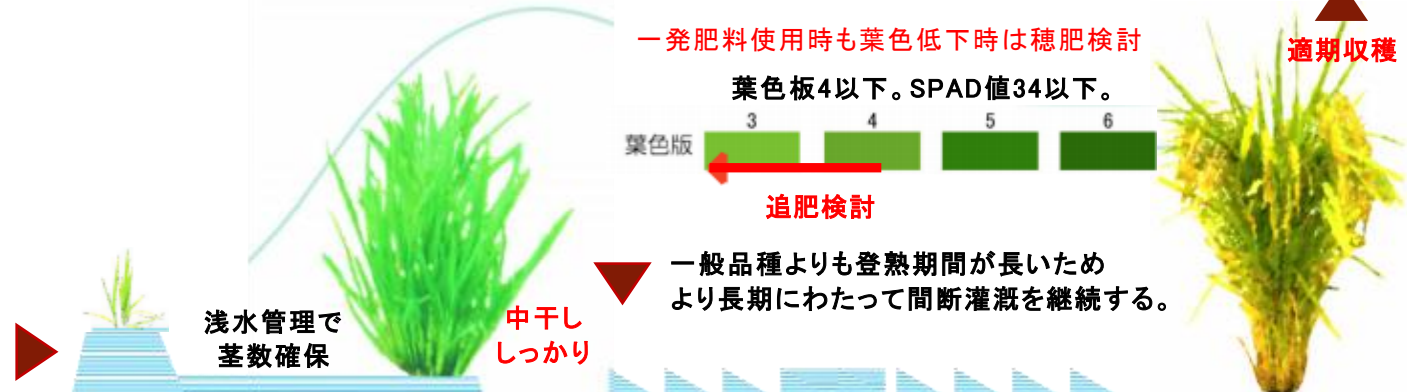
	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
推奨						田植								出穂							収穫
ひとめぼれ(参考)						田植								出穂							収穫

●作期留意点

- ・ 障害型冷害の危険気を避けた作期を選択する。
- ・ 6月移植などの極端な遅植えは登熟不良のリスクがあるため避ける。

●栽植密度

- ・ 坪あたり60株。
- ・ 多収のためには密植が有利。



分けつ期

最高分けつ期

幼穂形成期

出穂期

成熟期

＜施肥(N成分)目安＞

- 一発肥料(80日タイプ) 9～10kg/反
- ※ひとめぼれ栽培のN成分+1～3kg/反が目安。
- 圃場地力により加減する。
- 分施の場合は基肥6～7kg+穂肥2～3kg/反が目安

＜最高分けつ期生育目安＞

目標茎数	葉色	有効茎歩合
650 本/㎡	SPAD値 40	65% 以上

＜穂肥目安＞

- 1回目:出穂20～18日前頃
- 2回目:出穂15～10日前頃
- ＜実肥＞
- 登熟が遅れる懸念があるため非推奨。

＜収量構成要素の目標(750kg/反)＞

穂数	一穂粒数	千粒重
400 本/㎡	115 粒	23-24 g

＜播種量＞

- 地域慣行と同等。種子の大きさは一般品種と同等。
- 密苗栽培も可能。

＜消毒＞

- 未消毒種子のため必ず適切な種子消毒を実施。
- 農薬使用時の温度条件に注意する。

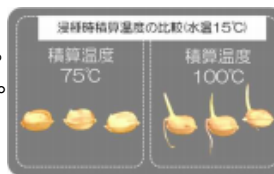
- 塩水選は行わない。

＜催芽処理＞

- 一般品種より早く芽が動くため加温のし過ぎに注意する。
- 水温10℃以上で浸種を行う。

＜育苗日数＞

- 地域慣行と同等。



＜中干し＞

- 小ひびが入り地固めできる程度にしっかりと実施。
- 過剰分けつが懸念される場合は、早めに実施。



＜冷害対策＞

- 幼穂形成期～穂ばらみ期に低温(最低気温17℃以下)が予想される場合は、深水管理。

＜高温登熟対策＞

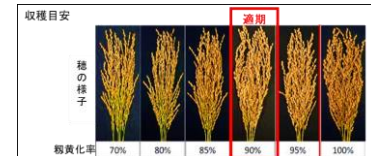
- 出穂後高温が予想される場合は、かけ流し灌漑や昼間の保水管理を実施。また落水時期を延長。

＜防除＞

- 地域慣行と同等。ただし下記やトビイロウンカ被害が大きい地域では箱施用での防除推奨。
- ※要注意病害虫
- ・紋枯病、稲こうじ病、白葉枯病、イネツトムシ、ニカメイチュウ
- 出穂が周辺作付品種とずれる場合は、カメムシ防除時期に注意。

＜収穫＞

- 籾黄化率90～95%程度の収穫を推奨。
- 穂先端からの胴割に注意しつつ、下部まで登熟させる。
- 籾黄化率90%未満の早刈りで未熟粒が多発し減収する。
- ゆっくりとした速度で収穫する。



＜乾燥＞

- 一般品種と同じ。

＜調製＞

- 網目は一般品種と同じ。
- 粒が大きいため、網選では品質向上につながりにくい。
- 着色粒や被害粒を中心に色彩選別機で選別。
- 白度の感度を強くすると収量減に繋がる。

東北(日本海側) ハイブリッドとうごう 2号S & 4号S【早生品種】栽培暦 一版

2025年11月 (株)水稻生産技術研究所

作期目安

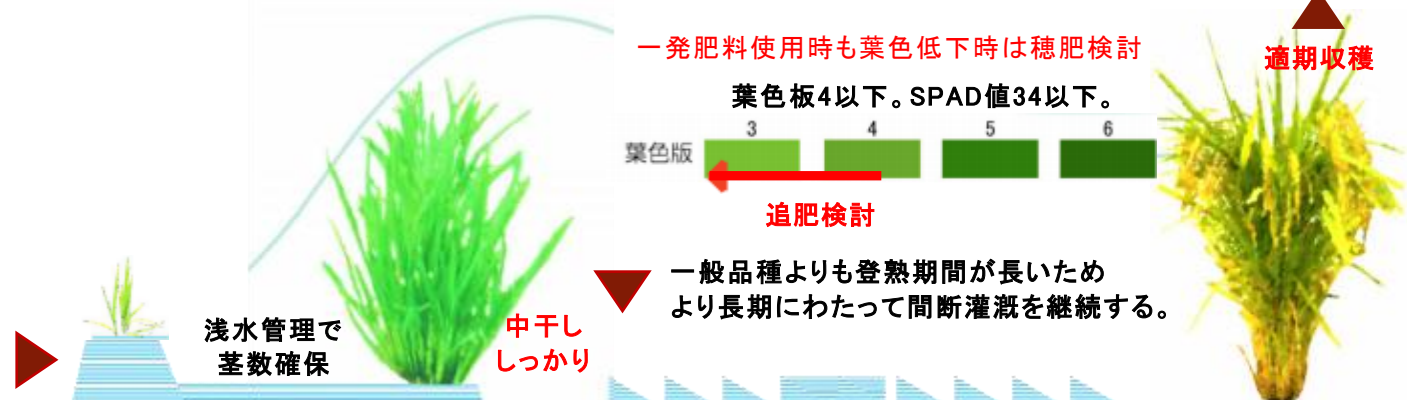
	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
推奨1						田植								出穂							収穫
推奨2					田植									出穂							収穫
あきたこまち(参考)					田植									出穂				収穫			

●作期留意点

- ・ 障害型冷害の危険気を避けた作期を選択する。
- ・ 6月移植などの極端な遅植えは登熟不良のリスクがあるため避ける。

●栽植密度

- ・ 坪あたり60株。
- ・ 多収のためには密植が有利。



分けつ期

最高分けつ期

幼穂形成期

出穂期

成熟期

＜施肥(N成分)目安＞

- 一発肥料(80日タイプ) 9～10kg/反
- ※ひとめぼれ栽培のN成分+1～3kg/反が目安。
- 圃場地力により加減する。
- 分施の場合は基肥6～7kg+穂肥2～3kg/反が目安

＜最高分けつ期生育目安＞

目標茎数	葉色	有効茎歩合
650本/㎡	SPAD値40	65%以上

＜穂肥目安＞

- 1回目:出穂20～18日前頃
- 2回目:出穂15～10日前頃
- ＜実肥＞
- 登熟が遅れる懸念があるため非推奨。

＜収量構成要素の目標(750kg/反)＞

穂数	一穂粒数	千粒重
400本/㎡	115粒	23-24g

＜播種量＞

- 地域慣行と同等。種子の大きさは一般品種と同等。
- 密苗栽培も可能。

＜消毒＞

- 未消毒種子のため必ず適切な種子消毒を実施。
- 農薬使用時の温度条件に注意する。

- 塩水選は行わない。

＜催芽処理＞

- 一般品種より早く芽が動くため加温のし過ぎに注意する。
- 水温10℃以上で浸種を行う。

＜育苗日数＞

- 地域慣行と同等。



＜中干し＞

- 小ひびが入り地固めできる程度にしっかりと実施。
- 過剰分けつが懸念される場合は、早めに実施。



＜冷害対策＞

- 幼穂形成期～穂ばらみ期に低温(最低気温17℃以下)が予想される場合は、深水管理。

＜高温登熟対策＞

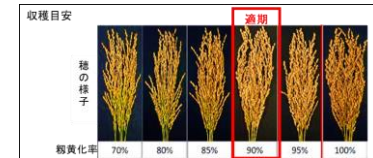
- 出穂後高温が予想される場合は、かけ流し灌漑や昼間の保水管理を実施。また落水時期を延長。

＜防除＞

- 地域慣行と同等。ただし下記やトビイロウンカ被害が大きい地域では箱施用での防除推奨。
- ※要注意病害虫
- ・紋枯病、稲こうじ病、白葉枯病、イネツトムシ、ニカメイチュウ
- 出穂が周辺作付品種とずれる場合は、カメムシ防除時期に注意。

＜収穫＞

- 籾黄化率90～95%程度の収穫を推奨。
- 穂先端からの胴割に注意しつつ、下部まで登熟させる。
- 籾黄化率90%未満の早刈りで未熟粒が多発し減収する。
- ゆっくりとした速度で収穫する。



＜乾燥＞

- 一般品種と同じ。

＜調製＞

- 網目は一般品種と同じ。
- 粒が大きいため、網選では品質向上につながりにくい。
- 着色粒や被害粒を中心に色彩選別機で選別。
- 白度の感度を強くすると収量減に繋がる。